

福祉のひろば

3
2013

特集

陸前高田市の仮設住宅と米軍基地のある
沖縄から生活と福祉を見る

仮設住宅入居者座談会——米崎中学校仮設住宅にて
仮設住宅の現状と住まい確保の取り組み 大坪 涼子
基地問題の実相とアメリカの思惑 伊波 洋二
生活問題が顕在化しにくい沖縄 繁澤 多美



ひろばトーク 伊藤 勇一さん（陸前高田市）
いとう ゆういち
作業所きらり 所長

作業所で栽培したいだけ放射線が出荷停止に。私たちは放射線の数値を示して、安心できる生産物を自信を持って消費者に届けたい。

写真は首里城近くの金城の石畳道 編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

http://www.kyoto-archi.co.jp/

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21

http://www.creates-k.co.jp

クリエイツかもがわ



TEL 075 (661) 5741

FAX 075 (693) 6605

価格税込・送料何冊でも240円

4月から障害者雇用率の引き上げ…支援のコツと
法則を体系的にまとめたノウハウで導く！

発達障害者の 就労支援ハンドブック

グイル・ホーキンス◆著 森田美子◆訳

長年の就労支援を通じた経験と90%以上の
就労実績の支援マニュアル！

- ①客観的に自分を理解する
 - ②指導のための4つの柱
 - ③就労のための道具10の技
 - ④大きなイメージ評価
 - ⑤具体的な方法で適職探し
- ↓就労に結びつける！



付録
DVD

「発達障害と就労」
成功するための樹図(47分)

発達の旅 人生最初の10年

旅支度編

中村隆一◆著

自分づくりの「旅支度」をはじめませんか？ 定価1785円
発達とは表面的な姿の変化だけでなく、生活の中で創り出される本
質の変化である。発達概念成立の道すじをたどりながら、発達研
究の方法論を探る。発達の過程を学ぶためのヒントがいろいろある。

東日本大震災

復興の正義と倫理


50
検証と提言

塩崎賢明・西川榮一・出口俊一・兵庫県震災復興研究センター◆編
復興プロセスに正義や為政者に倫理があるのかを鋭く問う！
復興予算の「流用」、被災者置き去りの「創造的復興」これでは、阪神
の「復興災害」が繰り返される。生活・住宅再建、人間復興をめざす50
の検証と提言！

定価2310円

東日本大震災から2年 仮設住宅での生活復興をみる

——陸前高田市 米崎中学校仮設住宅にて——



特集座談会（本誌10～16ページ）を米崎^{よねさき}中学校仮設住宅の集会所で行いました。震災前の陸前高田は、海あり山ありの自然豊かな土地で、「平々凡々だけどもとても優雅な生活」だったそうです。「あの平々凡々な暮らしがほしいわ」「今でも海を見るとホッとするよねえ。いいところだよねえ」「また戻ってくるかなあ」「戻ってくるから。そう思わなくちゃ」と故郷への思いを話されました。



応急仮設住宅の入居期限は原則2年ですが、すでに1年間の延長が決まっています。しかし、来年転居先が準備できるのかわかりません。私（申）が「来年転居できなければどうなるのですか？」と聞くと、住民の方は「3年住めたのだから、あと1～2年は大丈夫でしょう、と言われて結局ここに居ることになるのではないでしょうか」と答えられました。



仮設住宅の部屋は、ドアを開けるとすぐにキッチンとリビング、奥に4畳ほどの部屋が2部屋と風呂、トイレという間取りです。そこに親夫婦・子ども夫婦・孫の3世代が同居している世帯もあります。柱と壁の隙間には入居時からビニールテープのようなものが貼られており、とても簡単な造りに見えます。プレハブの壁は冷たく、発泡スチロールの板をはさむなどで寒さ・暑さ対策や、虫の侵入を防ぐ対策をしなくてはなりません。



座談会を行った集会所は建物の下に車輪が付いているトレイラーハウスで、複数の企業のキャンパで設置されています。しかし、このトレイラーハウスの貸出期限は9月末。その後どうなるのかは未定です。
座談会に参加してくださったみなさんは、とても元気で明るく、笑いが絶えませんが、「陸前高田をどんなままにしていくなのか」という話で盛り上がり、「復興には女性の力が必要！ 声をあげていかないと！」と力を込めておられました。(写真・文 申佳弥)

【ひろばトーク】

作業所で栽培したしいたけが放射線で出荷停止に。

私たちは放射線の数値を示して、安心できる生産物を自信を持って消費者に届けたい

伊藤 勇一 6

福祉のひろば

2013年3月号

●特集● 陸前高田市の仮設住宅と米軍基地のある 沖縄から生活と福祉を見る

〈座談会〉仮設住宅に住む人たちの暮らしと願い

| | |
|-----------------------|----------|
| —陸前高田市 米崎中学校仮設住宅を訪ねて— | 10 |
| 陸前高田市 応急仮設住宅一覧 | 17 |
| 仮設住宅の現状と住まい確保の取り組み | 大坪 涼子 18 |
| 現地取材を通して | 22 |
| あらゆるところでアメリカ優先を感じる沖縄 | 24 |
| 私たちの生活は私たちが守る | 山田 義勝 |
| 基地問題の実相とアメリカの思惑 | 伊波 洋一 31 |
| 生活問題が顕在化しにくい沖縄 | 繁澤 多美 38 |
| 第17回合宿研 in 沖縄に参加して | 43 |

●トピックス●

| | |
|-------------------------|----------|
| 定時制高校生たちに被災地取材を報告 | 46 |
| 元大阪府立婦人保護施設「生野学園」の記念碑建立 | 安原能里子 47 |

●連載●

| | |
|-----------------------------------|----------|
| フォーラム 社会福祉の原点に戻るために | 前田 鉄雄 50 |
| —今こそ、『真田是著作集』を読もう！ | |
| ひとつのこと—社会福祉労働と私たちの実践 | すみれ病院 52 |
| すみれ病院はどのような糖尿病医療をめざしているのか | |
| 連載 小川政亮 第二部 自伝 (12) | 小川 政亮 54 |
| 学術会議のもと社会福祉研連の成立、原爆訴訟、そして二つの旅 | |
| 相談室の窓から | 青木 道忠 58 |
| 未(不)就労の若者を対象とする就労・雇用チャレンジ協議会(つづき) | |
| わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」 | 早川 一光 60 |
| 不思議、ふしぎ、人間のつくり(その15) | |
| 育つ風景 子どもをわかってと奮闘する | 清水 玲子 62 |
| 穂波のアメリカ子育て事情【最終回】 | 吉田 穂波 64 |
| 働き続けるアメリカの女性たち | |
| 映画案内 | 吉村 英夫 66 |
| 『RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語』 | |
| 現代の貧困を訪ねて | 生田 武志 68 |
| 支援活動にかかるお金の問題 | |
| 施設訪問ボランティア 一期一会 外出介助「ふれあい」 | 70 |
| ホームレスから日本を見れば | ありむら潜 72 |
| 花咲け！男やもめ | 川口モトコ 74 |

●表紙の絵と写真●

絵=神門やす子
写真=首里城近くの金城の石畳道(下野祇園)



●カット●
川本 浩

みんなのポスト 48 / 今月の本棚 73 /

しりとりであそぼう！&憲法クイズ【最終回】 75 / 福祉の動き 76

●グラビア● 東日本大震災から2年

作業所で栽培したしいたけが放射線で出荷停止に。私たちは放射線の数値を示して、安心できる生産物を自信を持って消費者に届けたい

社会福祉法人愛育会 作業所さりり 所長 **伊藤 勇一**さん

(就労継続支援B型事業所・岩手県陸前高田市)

生産者に責任を押しつける対応に大きな憤り

福島県産しいたけが放射能汚染によって出荷が制限され、もしかやと思いき岩手県に問い合わせたところ、岩手産しいたけは問題ないと言われたのです。ところが、昨年二月に一六〇〇ベクレルまで放射線量が上がり、県は生産者に対してしいたけを売らないように自主規制を求めてきました。当時の安全基準値は五〇〇ベクレルでしたから大変な数値です。出荷自粛とは生産者が自ら進んで辞退することなので、この場合、出荷停止が妥当です。この県の対応に大きな憤りを感じています。

未だに県から明確な指導や実態調査はありません。県は国の姿勢がわからないから動きようがない、県が動かないので市からも連絡がない。非常に腹立たしい思いで仕事をしてきました。しかし、その思いを引きずって仕事を続けるわけにはいかないので、東京電力（以下、東電）に対して、不本意ですが和解を前提に合意書を取り交わして、賠償金を求めました。

東電と賠償金で交渉

賠償額請求明細の作成は煩雑で、確定申告の作業以上にむずかしいものでしたが、二〇一一年度までに菌を植えた原木についてはほぼ、希望する最低限の補償額を得ることはできました。しかし、放射能に汚染された原木は山の仮置き場に放置されたままです。廃棄処分しなければ汚染水が川に流れ、鮎やヤマメ、広田湾のワカメなど海産物の汚染につな



いとう ゆういち

1956年陸前高田市生まれ。東北福祉大卒後、1978年より社会福祉法人愛育会に勤務。2007年10月より通所事業所「きらり」現職。地元消防団で27年間活動し、ラッパ隊長・部長を担う。しいたけ栽培歴34年。東日本大震災の天津波直後から救援・支援活動に協力。本誌2012年3月号グラビアに登場。

があります。福島では高濃度の放射能に汚染された魚があがったと聞いています。汚染された木をどうするのか、市は、県や国が何も言わないから仕方ないと言います。除染が前提でなければ、しいたけ栽培を続けるかどうか計画が立てられません。結局、しいたけ栽培は、洪々中断するしかありませんでした。

私はしいたけ栽培を、入所施設で働きはじめたときから三〇年以上行ってきました。自信を持ってしいたけを栽培し、出荷してきたのに、消費者から「信じて買っていただけの責任をとるのだ」と言われたら、答えようがありません。

自信を持って消費者に届けたい

これまでの対応を考えると、行政からいくら「安全だ」と言われても消費者は信用できないと思います。新しい原木にも放射能が付着している可能性があります。木の皮をむいたらいいと言われますが、しいたけは皮がないとできないのです。

東電と合意はしたけれど、私たちの精神的な苦痛はまったく補償されていません。障害を持つ人は、自分たちがつくった野菜を地域の人たちに食べてもらえることで、その地域で生活していると実感できるのです。しいたけ栽培のような手の込んだことをせずに、喜びもない、お金になる仕事だけをすればよいのでしょうか。

現在、民間団体等の支援による放射能検査機器の設置を検討しています。公的機関の検査だけに頼らず、出荷・加工の時期に応じた自主的な簡易検査も繰り返し行い、安全確認後に自信を持って届けていきたいと考えています。

基地のある沖縄から生活と福祉を見る

（一） 今号では、①東日本大震災二年を迎える陸前高田市の仮設住宅から、自治体の生活再建やまちの復興の姿、②そして、憲法より日米安保条約や日米地位協定が優先される沖縄の姿、この二つを通して、それぞれが抱える問題と共通する課題を社会福祉を切り口に深めます。住民の生活やまちづくりをとらえる場合、現状に着目しつつもそれぞれの歴史や背景を踏まえることは言うまでもありません。しかし、この現実を目の当たりにすると、その歴史や背景を薄めてしまう姿に出あいます。まさに、被災地と沖縄です。今回は、現地での取材や研究活動（二月に開催した社会福祉研究交流会「第一七回合宿研究会in 沖縄」）を通して、二つの地からの現実の日本の構造的問題があることを浮き彫りにしました。

（二） 岩手県南部、太平洋に面する陸前高田市の被災状況を概括します。震災当日の人口は二万四二四六人。生存確認者二万二〇一八人（二〇一二年一〇月二三日現在）、死亡者（震災分）一七三五人・（病死・事故死等）四六四人、行方不明一四人、市内での遺体発見数は一五五五人。それぞれの人たちが地域や社会の中で働き、活動し、暮らしていました。働き、活動していた場が津波で破壊され流出します。全半壊した施設は、市役所庁舎、中央公民館・図書館・博物館・体育館・海洋センター・市民会館・小学校二校・中学校三校・二つの保育所・ふれあい教室・ふれあいセンター・ふるさとセンター、上水道六棟、広田診療所、ごみ焼却場、消防本部、火の見やぐら一五棟、消火栓一九三か所、防災行政無線親局、津波観測装置、土砂災害防止システム装置、水産施設、動力船二三五八隻、養殖施設三三四〇台、漁港・海岸施設、農地三八三・三ha、農業用施設七七二か所、林道六九か所、道路五〇km、公営住宅一五八戸、等々でした。そして、避難所は当初六三か所、最大八四か所、避難者数は、当初八九一五人、最大二万